

第 72 回プロレス文化研究会レポート

「力道山生誕 100 年とプロレス 70 年」 2024.6.22

岡村正史「プロ文研は力道山をどう語ってきたか」

まず、力道山に関するトピックを2つ。

1. 最新刊・細田昌志『力道山未亡人』（小学館）に関して

小学館ノンフィクション大賞受賞作。綿密な取材に基づいた力作だと思う。力道山の結婚式、葬儀の詳細など今まで分からなかったことが明るみになった。ただ、ここでは若干の疑問点だけ挙げておく。それは力道山の娘とされる金英淑（キム・ヨンスク）に関してである。

「本当に力道山の娘なのか懐疑的に見る向きもあるが、出産時期と残された写真の印象から、実娘である蓋然性は低くないと筆者は見ている」（136 頁）とある。どちらかと言えば肯定的な記述である。この点に関してかつて疑問を呈したのは朴一（パク・イル）で、『僕たちのヒーローはみんな在日だった』（講談社、2011 年）における田中敬子へのインタビューの中で、「顔は見れば見るほどよく似ていらっしやるのですが、あまりにも似ているので怪しいですね。北朝鮮はこういう人を探すのは得意ですから」と発言している。かくいう私も『力道山』（ミネルヴァ書房、2008 年）では懐疑的な立場を明確にした。ところで、『力道山未亡人』の参考文献には朴の著作や拙著は入っていない。読んでいないのか、読んでも参考にならなかったのか、その点はどうでもよい。読んでいないとすれば、「懐疑的に見る向き」の代表は誰なのか。

外ならぬ田中敬子自身である。彼女の著作『夫・力道山の慟哭』（双葉社、2003 年）において「これが真実かどうかは、DNA 鑑定をしてもらいしかありません。ただ主人は朝鮮に兄貴がいると言っていました、子供の話はいっさい聞かされたことがありませんでした。」と書いているし、7 年後の朴一のインタビューでも同様のことを語っている。田中敬子は 1995 年猪木が主催した「平和のための平壤国際体育・文化祝典」の際猪木から北朝鮮に行かないか誘われたが、断っている。「この頃の私は民団（在日大韓民国民団）との交流が盛んだったんです。…だから、北朝鮮に行くのは立場的に難しかった。」田中敬子はその後力道山最後の弟子といわれる琴音隆裕と北朝鮮に行く機会があったが、「娘」と会う予定はそもそもなかったということだ。著者は田中敬子にこの問題についてどの程度取材したのだろうか。

繰り返すが、本書は力作であり、大宅映子、阿部譲二、原由子など著名人が登場して一般の読者にもアピールできる要素が多い。田中敬子との関係性に重点を置いた点は新鮮である。しかし、その分力道山に関する記述がやや薄まっていることは否めない。

（敬称略）

2. ドラマ「チャンピオン太」における力道山とアントニオ猪木

あるマニアのご厚意によりテレビドラマ「チャンピオン太」の DVD を数か月借りて、全話を見ることができた。原作は梶原一騎、吉田竜夫の作画で「週刊少年マガジン」に連載されていた漫画のドラマ化である。1962 年 11 月～63 年 5 月にフジテレビ系列で毎週月曜日の夜に放送された子供向けドラマである。

中学生の大東太が力道山に弟子入りし、チャンピオンを目指す物語である。毎回のように、力道山本人が登場する。主題歌「少年チャンピオン」の一番はなるほど太の活躍を表す歌詞となっているが、二番は「僕たちの！ にっぽんの 輝く星だ 力道山」で締めくくられ、さながら力道山賛歌となってい

る。ドラマでは力道山が太を鍛え、論し、ときには山寺に修行に出したりするのだ。当時の子供たちが演技をする力道山をどのくらい楽しみにしていたのかは判断しかねる。当時8歳の私はたしか一回も見たことがないと思う。力道山のファンではなかったし、プロレス・ファンですらなかったからである。第23話で力道山はリキ・スポーツ・パレスの屋上？で太を前に語る。「敗戦のとき、ここいらは焼け野原なので、家は一軒も残っていなかった。みんなが、希望と自信を失った。俺はここに、城を建てようと思った。日本人に、日本人の誇りを、回復させるための城を。ハッハッハッハッハッ……わしの留守に、この城を守ってくれたのは、太、お前だぞ！」

高笑いする力道山はドラマでは留守がちで、半年の間にブラジル、香港に遠征している設定となっている。本物の力道山もオンエア中に香港、韓国、アメリカに渡っているが、渡韓に関しては極秘事項であった。力道山の出自が活字メディアで書かれ始めたのは70年代に入ってからであり、テレビで公然と語られるようになったのは愛弟子のアントニオ猪木が北朝鮮で大々的な興行を挙行した95年以降ではないだろうか。

閑話休題。力道山への挑戦を目指して来日する悪役レスラーや格闘家の前に立ちはだかる中学生レスラー太というのがドラマの本筋である。

ところで、第1話「死神曾長」のロケはオンエアの約3か月前リキ・スポーツ・パレスで行われた。悪役「死神曾長」を演じたのは猪木完至つまりアントニオ猪木である。死神曾長というネーミングを力道山はいたく気に入ったらしい。第1話のオンエアは11月5日であるが、オープニング映像のクレジットには猪木完至ではなく死神曾長と記されているのだ。ちなみに、猪木は当時日本人であることは秘密でブラジルから渡ってきた日系人ということになっていた。猪木が「アントニオ猪木」と名乗ったのはオンエアの直後の沖縄大会であり、正式には「死神曾長アントニオ猪木」だったという。余談になるが、ロケが行われた日の前日のリキ・スポーツ・パレス大会で猪木はレスラーになって初めてセミファイナルに登場している。「チャンピオン太」の裏テーマは猪木の出世物語であったようだ。

ドラマのオープニング映像には実際の試合の映像が用いられているが、厳密には第13話から一部差し換えが行われている。第12話までは力道山がゴリラ・マコニーというレスラーをストンピング、すなわち踏みつけているシーンがある。ところがいかにも力感がないのだ。倒れているマコニーの顔面をちょこちょこ踏んでいるようにみえてかっこいいものではない。そのシーンがカットされて、別の試合の空手チョップが決る場面に差し替えられている。私は力道山ファンではないと言った。ファンではない者がそれでもプロレスを見ていたのが当時の人気の証であった。が、小学生から見ても力道山の動きはいいとは思えなかった。力道山の動きがよかったのは57年頃までというのが持論である。華々しい外国人レスラーの前には動きは見劣りし、むしろ強豪外国人を紹介するプロデューサー的存在になっていたと言えるだろう。

ただ、レスラー力道山の商品価値という観点ではどうなのだろうか。あまり指摘されていないことであるが、力道山の試合を毎週テレビでみられるようになったのは61年8月以降のこと、つまり晩年の2年4か月にすぎない。力道山が興行を始めた54年2月から4年半は、プロレスはときどき中継されるビッグイベントという扱いだった。いわゆる「金曜8時」のレギュラー中継が実現したのは58年8月であるが、「ディズニーランド」との隔週中継だった。61年7月にリキ・スポーツ・パレスが完成し、いわばプロレスの常設小屋ができたことによって、「ディズニーランド」のあるときには深夜枠で録画中継されることになり「毎週力道山」が実現したのだ。「チャンピオン太」が放映された期間は「毎週力道山」の時期に重なり、プロレス人気を補強したとは言えるだろう。テレビ視聴率64.パーセントという歴代4位の記録を達成したのは63年5月「力道山対ザ・デストロイヤー」であった（ただし、「歴代4位」はNHK「紅白歌合戦」をひとつの番組としてカウントした場合の順位である）。

この月「チャンピオン太」は役割を終えたかのように放送が終了していた。

3. 力道山略年表（略）

4. 自民党略史（略）

5. 力道山に関する出版、メディア

牛島秀彦『力道山物語 深層海流の男』（毎日新聞社、1978年、徳間文庫、1983年）

村松友視『私、プロレスの味方です』（情報センター出版局、1980年）

同『当然、プロレスの味方です』（情報センター出版局、1980年）

同『ダーティ・ヒロイズム宣言』（情報センター出版局、1981年）

同『合本 私、プロレスの味方です』（ちくま文庫、1994年）

松竹映画「ザ・力道山」（高橋伴明監督、村松友視プロデュース、1983年）

「週刊プレイボーイ」「『統一新報』が報道した“もうひとつの力道山物語”」（1984年3月9・16日）

「毎日新聞」「力道山は『民族の英雄』」（1992年10月8日）

「アサヒグラフ」「二つの祖国を持った日本最強の男」（1994年3月18日）

「毎日新聞」「力道山は愛国者」（1994年11月25日）

「朝日新聞」「海峡の力道山」全5話（1994年12月）

門茂男『力道山の真実』（角川文庫、1985年）

大下英二『永遠の力道山』（徳間書店、1991年）

原康史『激録力道山』全5巻（東京スポーツ出版社、1994～1996年）

李淳駟（リ・スンイル）『もう一人の力道山』（小学館、1996年、小学館文庫、1998年）

村松友視『力道山がいた』（朝日新聞出版社、2000年、朝日文庫、2002年）

田中敬子『夫・力道山の慟哭』（双葉社、2003年）

猪野健治『興行界の顔役』（ちくま文庫、2004年）

岡村正史『力道山 人生は体当たり、ぶつかるだけだ』（ミネルヴァ書房、2008年）

朴一『僕たちのヒーローはみんな在日だった』（講談社、2011年）

岡村正史『「プロレス」という文化』（ミネルヴァ書房、2018年）

NHK「アナザーストーリーズ 戦後最大のヒーロー 力道山の真実とは？」（2022年6月17日）

細田昌志『力道山未亡人』（小学館、2024年）

6. プロ文研で力道山はどう語られてきたのか

第14回「力道山と日本人」（2002.11.2）

○チャンピオン太の中で力道山はプロレスが喧嘩の道具ではなくスポーツであることを少年に諭していた。実際の彼は58年以降プロレスを喧嘩と捉えていった。

○在日だからヒーローになれたという見方があるが、私は在日1世が普通のビジネスとしてプロレスに取り組み成功したと思う。

第18回「プロレス50年・・・力道山からボブ・サップまで」（2004.1.25）

○58年以降、プロレスはテレビのレギュラー番組化し、59年からのワールドリーグでテレビ人気は決定的となるが、活字メディアは冷淡となっていた。村松いうところの「ファンと一般人の隔たり」とリンクしている。

○村松は「世間はプロレスを冷たく見ている」という話を強調する必要があった。60年代ですでにそういうことが成立していると実態以上に誇張している恐れがある。

第 29 回「プロレスとメディア」(2007.7.10)

吉見俊哉論考『親米と反米』より

「力道山は、テレビカメラを明瞭に意識したアメリカ仕込みのショーマンシップに加え、反則技を繰り返す巨漢のアメリカ人に対する勇気ある小柄の日本人という構図を意識的にテレビ画面に演出していた。大阪や九州を地盤にした他の戦後のレスラーが、プロレスを格闘技以上のものとしては理解しなかったのに対して、力道山はプロレスがテレビの前に集合した数客万人の観衆に向けて演じられるナショナルな象徴劇であることを察知していた」

第 33 回「力道山対プロレス」(2008.11.1)

- ① メディアとの関係…プロレスとテレビの関係についての吉見俊哉の論考が興味深い。

吉見は、テレビが家庭に普及する以前と以後とでは力道山についての評価が劇的に変わったとするが、新聞報道を子細に検討すると、必ずしもドラスティックな変化はあったとはいえないだろう。

- ② スポーツ・ヒーローとして…力道山が朝鮮半島出身であることは常識化しているにもかかわらず、「日本のヒーロー」として考えるあまり、その点に積極的に触れない傾向も見受けられる。また、彼はプロレスというジャンルだったからこそヒーローになりえたのに、肝心のプロレスとはどういうものかについての考察があまりにもなされていなかったきらいがある。

- ③ 在日朝鮮人として…この視点を見据えた本に 96 年の『もう一人の力道山』があり出版当時は新鮮だったが、08 年の今読み直すと「北朝鮮ファンタジー」的要素が多く見受けられるのではないだろうか。

- ④ 興行、保守政治、裏社会…プロレスはもちろんプロスポーツそのものを興行として見直す必要がないかということを指摘しておきたい。

- ⑤ プロレス批評／スポーツ社会学的眼差し…プロレスのサブカル化に関して指摘しておく。村松以降の状況はプロレスに関する言説の肥大化と同時に拡散化であり、その分、力道山時代には顕著だったプロレスにまつわる「裏社会」的イメージも拡散化していった。ロラン・バルトのエッセーに関して、67 年に篠沢秀夫は CATCH を「レスリング」と訳したが、2005 年の翻訳では「プロレス」となった。プロレスが衰退してしまった今日において「プロレス」と訳す時代が到来したことは、逆に言えば、ジャンルの鬼っ子としての「プロレス」の毒がそれだけ薄まったということなのだろう。

第 34 回「力道山前夜を闘った柔道家たち」(2009.2.7)

プロレスの普及には「テレビ」と「力道山」以外の要素があったのではないか。この観点から、戦前までのプロレス、柔道・柔術、プロ柔道興行の実態、プロ柔道からプロレスへの転向者、などに焦点を当てた。

第 36 回「プロレス学最前線」(2010.7.10)

力道山対木村政彦戦(1954.12.22)のテレビ事情。全国に 5 万台。NHKは東京、大阪、名古屋のみ開局。民放は日本テレビのみ(読売テレビは開局していない)。試合開始は放送予定時刻を大きく外れて 21 時 19 分。テレビ、ラジオとも放送時間を延長して実況したが、東京、大阪に限定されたものだった。木村の地元の熊本ではラジオ放送しかなかったはずだが、延長されなかったのではないか。ただし、NHKが時間延長したかどうかは定かではない。なお、12 月 29 日より、「力道山対木村」の記録映画が松竹系で公開されている。

○日本におけるプロレス受容の特性…アメリカとちがってプロレスが「プロフェッショナル・レスリング」だった時代を経験せず、いきなり「プロレス」、しかもタッグマッチから始まり、力道山が敷いた「真に迫った八百長」路線が成功し、主流となった。したがって、カミングアウトは敵対的な行為と意

識される。

第40回「1954年の力道山——プロレス研究からの提言」(2011.11.26)

1. 『力道山をめぐる体験』の解説

力道山常識論と名づけられる言説がある。いわく、力道山のプロレスは敗戦後の日本人の対米コンプレックスを晴らすはけ口だった。しかるに、この言説にはプロレスが元来持つ魅力が欠落している。また、当時の日本人の力道山体験はもっと厚みがあるものではなかったのか。プロレスにはガチンコにはない「ドラマ性」「人間の不条理」(村西とおる)がある。力道山が見せたかったのは「生きざま」「闘魂スピリット」(田中敬子)である。力道山プロレスの芯には「強さ」を伴った「闘魂」があった。

2. 力道山とメディア史

街頭テレビ時代はラジオ全盛期ではあったが、力道山のプロレスは非日常的で、人々を群集として凝集させる特別な空間だった。やがてテレビは家庭のメディアに変化していくが、それにとまってプロレスも変化していった。社会学の対象となるのは「街頭テレビ＝力道山」という図式であるが、家庭メディアとしてテレビが定着していく過程において、プロレスはテレビ的なコンテンツとしての先駆者である。

3. プロレスは真剣 or 偽装

プロレス受容モードは、メディア言説を整理すると、偽装モード、半偽装モード、半真剣モード、真剣モードに四分されよう。力道山はこの四モードを使い分けたと考えられるが、この図式自体が実(ガチ)と虚(ヤオ)の二項対立を用意する近代スポーツ的価値意識の産物かもしれない。

4. 力道山と門茂男の真剣勝負問答

力道山はこの問答の中で、真剣勝負にはいくつかの段階があるとの見方を示している。木村政彦にとってプロレスは「偽装モード」としてしか認識できなかったが、力道山は「半偽装モード」、「半真剣モード」としての認識を有していた。すなわち、プロレスは真剣勝負そのものではないが、「真剣勝負」が何らかの形で組み込まれたジャンルなのである。

5. 力道山対木村政彦

増田俊也は、プロレスはショーであると断定した上で、そのショーによって人生を踏みにじられた木村への強い思い入れから著書をしたためた。しかし、プロレスを「ショー」「八百長」と割り切って見失うものはないのか。プロレスにおける命を賭けた戦いはほんとうに存在しないのか。木村は力道山の打撃になぜ対応できなかったのか。「自信があるなら、やり返せばいいのよ」(芳の里)。プロレスとはそういうものだ。が、木村は柔道を信仰していたがゆえに、プロレスのシステムをじゅうぶん理解できなかったのではないか。プロレスのシステムとは、レスリング技術の中軸にブック化された試合、ブック破りと対応技術、当該試合以外での対応(政治力など)が取り囲むといったように、「真剣」と「八百長」の多重構造を有している。

6. プロレスの本質＝技術論

プロレスの基礎技術構造とはレスリング技術である。そこに、パフォーマンス技術として受け身(バンプ)、誇張した動きや技術、リアクションが付加されていった。ところが、パフォーマンス技術のみがアレンジにアレンジを加えて肥大化していき、現在のプロレスはパフォーマンス技術が基礎技術化してしまっているのではないか。

桜井康夫は言う。プロレスはレスリングである。それゆえに、人々の魂が揺さぶられる文化である、と。

第44回「プロレスの現在、過去、未来」(2013.2.16)

・1950年代の日本におけるプロレスの生成を、当時の大衆的な文化の状況のなかで考察する。キーワー

ドはアマレス、柔拳、プロレスとの結節。

第56回「プロ文研の論点Ⅱ」(2017.3.4)

○大人が子供に対して「力道山は、ほんとうは朝鮮人だ」と指摘することがあった。→初期の熱狂からさめていった大人のプロレス差別と朝鮮人差別がクロスしていったのではないか。

○プロレスにつきまとうモヤモヤの原点は力道山対木村にある。→予定調和の馬場と違って猪木の試合は後味の悪いものが多かったが力道山の暗い影を引きずったのか。→プロレスはきれいなウエルメイドプレイだけでは飽きられる。矛盾を孕みながらも新しい刺激を導入して変容していくのがプロレスだ。→力道山はすでに後味の悪さが必要と意識していたのか。→アメリカ修業時代にいろいろな経験をしていったのではないか。

○日プロは力道山時代後半からチョップ中心のラフファイトが主流であり、ブリッジを使う猪木の技には新鮮味があった。

○レフェリーはバタ臭い人の系譜だ。国籍不明のイメージがある。

○プロレスでほんとうのスターになるのは難しい。力道山には創業者の強みがあり、馬場には日本テレビのプッシュがあった。その点、猪木には特殊な才能があったと見た方がよい。メカニズムを越えて客のハートをつかむ芝居、芸術的反射神経の凄さは初代タイガーマスクを除いて類を見ない

フリーディスカッション

【田中敬子、百田光雄】

○田中敬子は今でも闘魂ショップに勤務しているのか？→确实だ。

○力道山の命日に田中敬子は午後墓参りに行っている。午前中は会いたくない人が来るので避けている。→避けたい人とは百田光雄側の人か？→本門寺に墓の管理料を払っているのは田中側か百田側か？→メディアが力道山を取り上げる場合、田中サイド、百田サイド、どちらにつくのか選択を迫られる。百田サイドにつけばベルト、コスチュームなどグッズを自由に使えるが、出自の問題には一切触れられない。田中サイドにつけば出自の問題に自由に触れられるが、グッズの使用は限定的となる。→テレビ局は力道山の写真が写っていると隠すらしい。写してしまうと百田サイドからお金を請求されるようだ。○田中敬子は今でも民団とのつながりがあるのか？→朴一のインタビューは在韓歴史資料館で行われた。→NHKの「アナザーストーリーズ」が帰国船上で力道山と「娘」が会ったことを取り上げた。そのことに関してどう思うかと朴一に手紙を出したら、返事はなかったが、代わりに朴一の半生を描いた本が送られてきた。

○細田昌志の前著『沢村忠に真空を飛ばせた男：昭和のプロモーター・野口修評伝』はプロモーター野口修のやるせなさ、無常観を感じて、後味は良くなかったが、今回の『力道山未亡人』は読後感がよかった。

○力道山の講演会では映像、写真を使えない。本も販売できないのは会場に公民館法が適用されるから。

○徳川慶喜の末裔と知り合いになったが、テレビで慶喜を取り上げる場合声をかけてくれないといやだと言っていた。先代までは確実にテレビ局から挨拶があったようだ。権利関係ではなく、心情的部分が大きい。→土方歳三の末裔は「テレビで勝手に先祖のことを言われると心外」と言っていた。→歴史上のライバルがマウントをとってくる場合がある。→竜馬を名乗る居酒屋は多くあるが。→「藝術新潮」「太陽」など有名雑誌が京都の寺の庭園を撮影する場合法外な使用料を請求される。→裁判になって出版社サイドが勝っても出入り禁止になるのでデメリットが大きい。→テレビはもめ事をいやがるから金で解決しようとする。

【梶原一騎、「チャンピオン太」、リキ・スポーツ・パレス】

○私の世代（55 歳）は『男の星座』『プロレススーパースター列伝』など梶原一騎史観を通してしか力道山を知りえない。手塚治虫の作品ならばありそうな時代の制約に関する注意書きが梶原の作品にはない。そのため梶原史観からいまだに脱しきれない。→存命のレスラーはどんなにウソを描かれていても文句は言わない。→『スーパースター列伝』のミル・マスカラス編で、デストロイヤーが大変な悪人のように描かれていて腹が立った。→『ジャイアント台風』で馬場が、カルネラのフック一発で力道山先生がノックアウトされたのを回想する場面があるが、きょうの岡村氏の発表で事実に基づいた描写であることが確認できた。

○「チャンピオン太」のオープニング映像はリキ・パレスでの実際の試合の様子が使われているが、力道山が倒れているゴリラ・マコニーの耳をめがけてストンピングしている。しかもカメラに背中を向けたストンピングで、普通の攻撃ならば観客にわかるように力道山は向きを変えるはずだが、そうはなっていない。これは普通の攻めではなく、ふがいないレスラーへのお仕置きではないのか。→たしかに見栄えのしないストンピングで、観客の目を意識していない。少なくとも、カッコのいい攻めではない。同じ試合でスカル・マーフィーが力道山の空手チョップを受けるシーンもふざけたような受けに見える。この試合の何週後かの同じ対戦カードにムース・ショーラック、アート・マハリックが乱入し、力道山は右肩を亜脱臼させられ、レスラーになって初めて欠場に追い込まれる。マコニーへの力道山の攻めは乱入を呼び込んだ伏線だった可能性はないか。→1 年前のリキ・スポーツ・パレスの開幕戦のメインは力道山、吉村道明対ゼブラ・キッド、ドン・マノキャンだったが、吉村が戦闘不能に陥り、力道山が試合後観客に謝罪した。後楽園ホールはまだなかったが、リキ・スポーツ・パレスにはプロレスの磁場を狂わせる何かがあったのだろうか。→外国人が張り切り過ぎて日本側が動けなくなることは結構あったのではないかな。→後楽園ホールでは、ジャイアント馬場、大熊元司対ブル・ラモス、ポール・ジョーンズの 3 本勝負で、1 本目に外人組の猛攻を受けた大熊が動けなくなり、フォールされ、そのまま試合放棄し、馬場が一回も出場できなかった試合があった。→外人側はどんな技を使ったのか。→パンチ、キック、ボディスラム。そんなものだったと思う。→シン、上田組は坂口、小林組との対戦などで過激さを表現するのに小林を戦闘不能に追い込んだりした。→シン、上田にはストーリー性があったが、吉村や大熊の場合はストーリーを感じない。→映画「アイアンクロー」でマイク・フォン・エリックはドロップキックを放ったが肩を脱臼し、それが原因で心身ともに不調となってしまった。→YOHがSHOUとの対戦でエルボードロップを放とうとして脱臼し、1 分くらいで試合が終わってしまった。→尾崎魔弓が豊田真奈美のドロップキックを浴びて動けなくなったことがある。→「チャンピオン太」の場合、オープニング映像に視聴者の苦情は来なかったのか。

○リキ・スポーツ・パレスの入り口は階段になっていて、意外にみすばらしい。→円形の建造物で、旧両国国技館を想起させる。大相撲への思いが反映されていたのではないかな。→建築家の安藤忠雄は若い頃ボクシングの練習に励んでいたが、力道山は安藤にナイトクラブの建築を依頼した。安藤にとっては楽な仕事で、多くの収入を得た。安藤いわく「金は腐るほどあったが、建築家としては腐ってしまう」と最終的には力道山の依頼を断ったという。

【力道山】

○力道山の出自はいつごろから明らかになったのか。→プロ文研の初期に、リー・トンプソンは出自はほぼ完全に隠蔽されており、ほとんどの人が知らなかった、とした。これに対して知っている人はいたという説が対立した。→宝塚のシニアカレッジでのアンケート（高齢者対象）では「知らなかった」が多数派ではあったが、「知っていた」人もそこそこいたという結果だ。トンプソンは「知っていた」には「後で知った」人が多く含まれているのではないかと疑念を呈した。→前田日明は親から芸能、スポーツ選手について、あの人も在日と聞かされていたが、それは暴露ではなく励ますための文脈だったと語

っている。→在日、およびその周辺には力道山が在日であることは届いていたろう。→朴一は大みそかに在日の親戚、知人が集まっていっしょに紅白歌合戦を見る光景を紹介している。芸能通のおじさんがいて、この人は在日、この歌手も、と情報を提供するのが風物詩となっていたという。→牛島秀彦の本を読んで力道山が在日であることを知り、ショックを受けたが、大衆文化の現実を見ていないとだめだと痛感した。→力道山の存命中に「向こうの人」らしいと親から聞いた記憶がある。

○10代半ばで渡日したわけだが、テレビで聞いた力道山の音声には朝鮮なまりがなかった。これは大日本帝国の日本語教育の成果なのか、本人の努力の結果なのか。→力道山の音声聞いたことがない。→当時はリング上でマイクアピールはなかった。インタビューだけだ。→渡日当初はなまっていたようだが、レスラーになってからはなくなっていた。→大山倍達はなまりがあった。

○力道山時代のストーリーラインはどのように観客に伝わっていたのか。スポーツ紙記者が伝えていたのか。→「週刊ファイト」の井上義啓編集長によると、新幹線はまだなかったもので、あらかじめ豊登や吉村から電話で話を聞いて予定稿を書いておき、実際の結果と照合して修正したという。→井上讓二編集長の話では、井上義啓編集長がいちばん疎かったらしい。→あの人は本質的に芸術志向だった。→晩年に姪たちと訪れたのはアメリカではなく、フランスだった。モンサンミッシェルに行きたかったらしい。

○1958年には力道山は半年以上のブランクがある。もっと試合があれば金儲けができたのに。→1957年10月のルー・テーズ戦で燃え尽きた部分がある。それに外国人の招聘が大変だった面がある。→58年9月以降シリーズが定例化し、レギュラー中継が実現した。いわば、テレビ局によってシステム化された。

○力道山のレスリング技術的なベースはどの程度あったのか。どれくらいサブミッションができたのか。→当時の新聞記事を見ると、「今のプロレス・ブームはしよせん力道山ブーム、空手チョップブーム」でレスリング技術に欠けるとあった。→映像を見ると、関節技にけっこう対応しているが。

【大相撲、プロ柔道、柔拳】

○大相撲の四本柱がなくなって、吊り天井になったのは1952年。6場所になったのは1958年。力道山が力士だった時代はまだ2場所。→場所数が増えて八百長が増えたか？→八百長をしないと体がもたない。→ただ数年前に八百長が問題視されて以降、上位陣が安定しなくなった。元大関がごろごろいる状況になっている。→江戸時代には、競技として体系化されていなかった。看板大関といって、見栄えだけの大関すら存在した。江戸時代には明確に見世物であり、明治以降神事の相撲と無理矢理結び付けられた。

○プロ柔道の詳細はどうだったのか。→ショーアップされず、面白くなかった。→これに対して、柔拳は日本人の柔道家とトルコ人ボクサーの対戦で、柔道家が勝った。ボクサーにはユセフ・トルコや後にタレントになったロイ・ジェームスがいた。→ロイ・ジェームスの父はロシア革命で迫害されて日本に亡命したタタール人で、「だったん人の踊り」(ボロディン)を調べていて、ロイ・ジェームスに行き当たり、驚いたことがある。→全日本女子の松永兄弟も柔拳に出場していた。

【社会学の見方】

○吉見俊哉は街頭テレビから家庭への普及とテレビ史を語るが、地方によってメディアの差があったということは重要だろう。→街頭テレビがない地方では映画館がかなりカバーしていたろう。→ニュース映画が盛んだったし、ニュース映画専門館もあった。映画館に毎週行く人も大勢いた。→テレビが家庭に普及して以降プロレスのストーリーラインは浸透していった。→大学の研究者はテレビを取り上げると論文の値打ちが下がると考えている節がある。→吉見も読書家のテレビ観が反映されている。私は吉見が占領期アメリカニズムのアイコンとしてトニー谷を論じているのに感服したが、私より2歳下の吉

見が、トニー谷が司会をして大人気を博した「アベック歌合戦」に言及していないのに違和感を抱いた。吉見はおそらくその番組を見ていない。NHKしか見ない家庭だったのかな。

○プロレスは真剣勝負そのものではないが、何らかの形で真剣勝負が組み込まれているという見解についてどう思うか。→村松友視が、馬場は「プロレス内プロレス」で猪木は「過激なプロレス」と称揚したが、結局はどちらもプロレスだった。→小学校のある時点までは真剣勝負と考えている自分がいた。→解説者の山田隆はマスカラスのフライングボディアタックがなぜ決まるのかに関して「レスラーは闘争本能があるから向かっていくんですよ」と屁理屈を唱えていた。→ドリー・ファンク・ジュニアのスピニング・トーホールドはアメリカで認知されていたのか。→技に威力のアピールには相当の努力、時間が必要だが、ドリーの場合は初来日であり、いきなりタイトルマッチで啓蒙する時間はなかった。→だから、馬場がギブアップしたとき、「そんなので決まるの」とヤジが飛んだ。→数十年もこんなに楽しませてくれたジャンルだからいいじゃないですか（笑）。

○アメリカでは、レイスやフレーザーなど世界チャンピオンが負けるが、それはなかったことにして次の街に移動する。全国ネットがなかったから可能だった。→その点、日本は全国ネットがあるから勝ち負けにこだわる。→プロレスは嘘に嘘を重ねた世界。

○パフォーマンス技術の肥大化に関して、自らの腕や足を使って大きな音を出し技のダメージを強調させる行為についてメモを取りながら観察したことがある。90年代から増加していた。まったくしないレスラーもいる。→控室でモニターを見ながら猪木が怒っている光景に出くわしたことがある。猪木いわく「東洋人の肉体にはバタ臭い色気がない。だから、緊張感で色気を出す必要がるのに、緊張感が足りない」。

○ウイル・オスプレイは「作品」志向の強いレスラーだった。大阪のラストマッチはこういう作品を残したかったという例だと思う。